

学内広報

2019.8.26

no. 1525



「高校生のためのオープンキャンパス2019」大学院学生による噴火実験@地震研究所



志ある卓越。  東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

教養学部創立70周年記念シンポジウム「学際知の俯瞰力」より
「駒場スタイル」の未来

教員検索の情報が自分で更新できるようになりました

教養学部創立70周年記念シンポジウム「学際知の俯瞰力」より

「駒場スタイル」の未来

1 駒場スタイルとは？

武田●まず、駒場スタイルとは何かについて。思い浮かぶのは、研究・教育の総合性、学際性をもたらす知的な活力、ユニークな人材輩出、既存の枠にはまらない研究、実践的な問題解決能力の育成あたりですが、いかがでしょうか。なお、発言は一人3分以内でお願いします。

学問的彷徨い人も落ち着ける場所

岡ノ谷●私は小鳥のさえすりなどから人間の言語の進化を探る研究をしています。最初は千葉大学の文学部でした。小鳥の脳を調べていると「それは文学部でやること？」と言われました。その後、理化学研究所に移りました。すると「理研で言葉の研究を？」と言われました。そんな学問的彷徨い人だった私が落ち着いたのが駒場です。駒場スタイルとは、文理融合の学際研究をし、それを支える教養教育を行うことだと思います。ただ、駒場でも文系と理系の壁は感じます。それを乗り越える仕組みを作ることが重要ですが、なかなか難しいのも現状です。

鹿毛●私は学生を野放しにすることで知られる京都大学の出身です。東大に着任して、教員が学生を細かく指導していることを知り、東大生は大変だと思いました。教員にとっても、前期課程の授業をするのは大変です。たとえば一般政治学の授業では、全体を俯瞰して教えることが求められ、自分の苦手な部分もきちんとカバーしないとイケません。生半可なことをいうと厳しく突っ込まれますから、周到な準備が必要で、それも毎年やり直さないといけない。教えるほうも非常に勉強になり、それが自分の専門にフィードバックされていると感じます。学生にも効果があるとよいのですが。

金子●私は生命とは何かを理論物理を用いて研究しています。こうした分野の研

※上記は抄録です。発言は省略されている場合があります。



武田 将明
准教授 コーディネーター



東 浩紀
批評家、作家



岡ノ谷 一夫
教授

究体験ゼミに、1年生が意外とハマります。まだ専門にわかれておらず、自分が知りたいことに必要なものを素直に学ぼうとするからです。学際というと、学問分野がわかれていてそれを架橋するような印象がありますが、振り返れば学問分野がいまようになってからせいぜい100年ぐらい。人類の長いスケールからみたら短いものです。学問がわかる以前に立ち返って考える。それが駒場スタイルにつながるように思います。

西崎●駒場の魅力は、開放性、風通しのよさ、優れた先生と才気ある学生がいることだと思います。そして、新しもの好きな面と古いものを大切にしている面の両方がある。私の分野でいうと、南原繁、矢内原忠雄のお二人がアメリカの研究者との交流を1950年代に始めていたのが現在のアメリカ太平洋地域研究センターに生きています。歴史を大事にしなが新しいものを積み重ねていくのが特徴的。一方で思うんですが、学生の頃は学際性なんてわかりませんでした。私は4年生になって基礎がなっていないことを痛感して学外に出ました。教養教育、学際性の難しさの表われ。学生の目から見てどうなのかを考えないとイケないと思います。

自由すぎたので大学を離れました

東●私は駒場で科学史・科学哲学から表象文化論に進みました。そこで社会と大

学を自由に横断することを教えてもらった。哲学は社会と関係し、学内と学外を横断しないと意味がない。大学院時代から出版界隈で仕事をしたのは、そういうことを許容する環境があったからこそ。ただ、その後は大学から離れました。どうして大学でうまくいかなかったかというと、皮肉なことに、駒場が自由すぎたのだと思います。駒場スタイルとは自由であることではないでしょうか。

2 駒場スタイルの発信

武田●次のトピックに移ります。教養学部は東大の中で知名度が低いという声があります。東大というと安田講堂や赤門が有名ですが、どちらも本郷キャンパスのものです。駒場の留学生には「教養部に赤門がなくて残念」といわれます。今後の発信はどうすればよいでしょう。

西崎●教員も学生も卒業生も、個々の活躍は目立っていて、発信力はあると思います。私はGPEAKに関わってきました。様々な国の学生がいて刺激的ですが、国際プログラムの運営は非常に大変です。普通の授業プラスαの仕事になり、教員には試練です。短期的なサイクルで動かす傾向があるが、長い目を見た地道な活動と、覚悟と資源も必要です。産学連携の点で言えば、70周年記念の本*では、大隅先生が、昔は産学連携反対がスローガンだった、と話していました。今では軍

新制東京大学の第1回入学式が行われたのと同じ7月7日、教養学部の創立70周年記念シンポジウムが900番教室にて開催されました。ビデオメッセージ紹介や2つの記念講演が展開された第1部に続き、第2部では現任教員と駒場に縁が深い方が登壇し、駒場におけるユニークな研究・教育活動、すなわち「駒場スタイル」について議論しました。1時間にわたって展開された議論の様様をダイジェストでお届けします。



鹿毛利枝子
准教授

金子邦彦
教授

西崎文子
教授

事研究を考えないといけません。軍事研究は予算だけでなく発想の点でも他の学問分野に影響を及ぼします。発信についても広い視野で見たほうがいいでしょう。

必死に発信する必要はないかも

金子●駒場の理系は発信が下手だと思います。多くの人は大隅先生=東工大と思っていますからね。うちの学科からは総長大賞が2年連続で出ました。東大のベスト学科といってもいい。でもその割にPRできていません。ただ、その受賞者は、円城塔*の小説を読んで興味を持ってうちの研究室にきました。あまり必死に宣伝せず、「じわじわ発信」でいいのではと思う。気づいたら駒場の人だった、という奥床しさも駒場スタイルでは？

鹿毛●大学は研究の水準こそが価値。水準を上げ、それを見て学生が集まり、さらに水準が上がって……というのが、知名度を上げる近道です。私のいる社会科学専攻では、計量政治学的世界的研究者が輩出しています。プリンストン大学教授の今井耕介さん、MIT准教授の山本鉄平さん……。海外で東大教員だというと「法学部じゃないのか」と聞かれますが、そこで彼らの名を出すと納得されます。「卒業生の七光り」ですね。卓越した研究者を出し続けることに尽きます。

岡ノ谷●研究室から学生が巣立ち、自ずと発信してくれています。学位を取った

後フルートを吹いて生きている人、卒論をもとに小説を書いて新人賞をもらった人、同志社大学の研究所を駒場色に染め直している人、文系だったが自然にプログラミングを身につけて企業で活躍している人……。卒業生が発信するのが駒場スタイルだと思います。思うに、21世紀の教養人には心と体の理解が重要です。それには文系の知識と考え方が必須となるでしょう。人工知能をやるなら、現象学も他我問題も心の科学も知らないとならず。語学もそうです。外国語を学ぶのは世界の多様性を知ること。Google翻訳がいくら発展しても人間自身が語学をやらなければいけない。そうした姿勢を駒場が発信するのが大事です。

東●駒場時代の指導教員だった高橋哲哉先生と本*で対談しました。高橋先生はデリダを研究していて、私が院生だった頃、文芸評論家の加藤典洋さんと歴史主体論争をしていました。簡単にいえば、第二次大戦の犠牲者を誰が追悼すべきかという話。私はもともと高橋先生のデリダ解釈に異論もありましたが、先生がデリダ哲学を使いながら現実に関わる様子を見ていて、哲学者は個々の解釈の違いを超えて社会に介入しないとダメだと思っただけです。発信そのものが教育となって学生を育てるのだと思います。

武田●それぞれのお立場での発言が随所で響き合っているのが面白いですね。

第1部 創立70周年によせてー駒場へのメッセージ

総長挨拶 ①	五神 真
学部長挨拶 ②	太田邦史
ビデオメッセージ ③	大隅良典 (東京大学特別栄誉教授)
パイプオルガン演奏 ④	ヘルマン ゴチエフスキ教授
記念講演1 ⑤ 「駒場に期待することー 教養知と環境」	浅島誠 (東京大学名誉教授)
記念講演2 ⑥ 「共感できない人が隣に いる。ライン交換、どう しますか？」	ロバート キャンベル (東京大学名誉教授)

第2部 駒場スタイルの未来

パイプオルガン演奏	中川岳
ショートメッセージ	小川桂一郎名誉教授、佐藤俊樹教授、ジョン ボチャリ名誉教授、長崎暢子名誉教授、石田淳教授
ラウンドテーブル 「駒場スタイルの未来」	東浩紀、岡ノ谷一夫、鹿毛利枝子、金子邦彦、西崎文子、武田将明
閉会挨拶 ⑦	石田淳

総合司会 渡邊あゆみ(NHKエグゼクティブアナウンサー)



浅島先生は、駒場農学校との敷地交換で本郷から駒場に移った一高の歴史、そしてそこから現在に至るまでの教養学部の歴史を概観。混沌とした現代社会では、知識と知恵と知力の総和である「教養知」の必要性が高まっていると述べました。キャンベル先生は、「想像」に「思いやり」とルビをつけた江戸時代の文献や、子どもと同伴でないと入れないロンドンの公園などを例に、昨年の入学式の祝辞につながる話をされました。70周年記念事業実行委員長を務めた石田先生は、この事業には「駒場ヒストリア」という隠しタイトルがあったというエピソードを紹介しながら、3時間半に及び会に幕を下ろしました。

*金子研究室出身の作家。ペンネームは金子先生の小説に登場するプログラムの名が由来

駒場スタイルの未来

武田●最後は未来についてです。駒場スタイルはどのように維持すればいいのか。学際性は伝統ですが、ゆえに制度に取り込まれていないか。教員の忙しさはどうすればいいか。また、構成員の多様性はどのように確保すべきでしょうか。

大学は奇跡を生む場である

金子●リアルな世界でないとできないのは奇跡を生むことです。AIに奇跡は起こせません。何もできなかった学生が数年後に大化けするのを見ることがある。あれは奇跡。奇跡を生む場であることが大学の使命です。研究室という共通の場で学生と向き合っているうちにそれはたまには起きる。教養とは冗談をわかり合えること。冗談が通じ合う場で何か生まれる。なので、教員は忙しい雰囲気を出してはダメ。多忙でも冗談を言って不思議な場を保ち続ける。それを自信を持ってやるのがいいと思います。

西崎●私はグローバル地域研究機構の機構長をやっています。いろいろな地域の研究センターをつなげて一つの枠組みを作るもの。課題は相互の研究を可視化することです。皆面白いことをやっている

が互いに何をやっているか知らない。これは駒場の一つの現状です。誰に向けての可視化か。学外はもちろん、学内の教員相互の可視化もすべきです。イベントなどの情報も含めて。大学院生も自分の研究に専念しすぎてほかの研究を知らない面があります。多様な研究のエクスポージャーが駒場の未来につながるはず。

岡ノ谷●金子先生のように体力ある先生ばかりではありません。改革しようとするほど研究時間は減る。駒場には改革を拒否してきた歴史があります。秋入学の議論で駒場は反対しました。入試への英語民間試験導入に関しても英語部会が明確に反対しました。対象によっては改革をしないことを主張する勇気が駒場にはある。今後も持ち続けるべきです。構成員の多様性でいうと、今日は6人中3人が東大卒以外。こういう場に東大文化に染まらない人がもっと入るべき。東大出身者はまじめにやりすぎる傾向がある。きっちりやらないことも文化に入れたい。

鹿毛●本^{*}の原稿を書くにあたって調べてみると、駒場の教員と事務職員の比率は4対1でした。ハーバードだと1対4、プリンストンは1対5です。どれだけ教員が事務仕事をしているかという話。職員が何人も働いているともいえますが、やはり厳しい。たとえば、研究費を事務仕事の人件費に回す手はあるかもしれませんが。

東●私は会社を経営していて、マネジメントに興味があります。そうすると改革をどんどんやりたくなる。でも、私の本の読者にはそんなこと関係ないんです。本を読みただけ。大学を見る社会も同じで、学内の施策なんて興味がない。大学が出す研究成果しか気にしない。研究成果を生み続けるしかないでしょう。

武田●全員きっちり話してくれましたね。話を聞いていて、研究倫理が問われるときこそ駒場の学際性格が役立つ、と思いました。学生への可視化も本当に大事



本郷時代から一高の倫理講堂(現・900番教室)に掲げられていた「菅公図」「田村將軍図」(駒場博物館蔵)の複製画が会場を彩りました

当日は七夕。会場入口に笹飾りが備えられ、「南原先生、矢内原先生の精神の復興を」「駒場猫が健康で幸せに暮らすように」など、来場者が祈りを短冊にしたためていました



です。PEAKの授業は一般学生も対象なのに履修者は少ない。PEAK生の刺激は一般学生にも大きいのに、そのことの可視化が十分ではないのだと思います。

金子●体力で頑張っているわけではなくて。忙しくないようにするためには、だめなものにNoということが必要です。

岡ノ谷●同感です。この前、新学術領域研究の見直しで、複合領域をやめるといった話が出た際、駒場が否定されたように感じました。そこにNoを言いたい。いろいろな複合からしか新しいものは生まれないと思います。あと、私は学生に論駁されるのが好きで、よく論駁されています。ある学生は、研究室に来た理由として、「先生ぐらいでなれるなら俺もなれるだろうと思った」と言いました。そういうところを見せてあげることは駒場の雰囲気の良さにつながるのかもしれませんが。

武田●それは謙遜がすぎますね。でも、学生と教員の関係のよさというのは確かに駒場の特徴でしょう。それが今後も変わらず続いていくことを願いつつ、ラウンドテーブルを締めさせていただきます。



※創立70周年記念出版「東京大学駒場スタイル」(東京大学出版会/2019年6月刊/2500円+税)

本シンポジウムのチラシに使われたビジュアル
Design: Takuya Abe



東大教員の新しい基礎知識が誕生

教員検索の情報は自分で更新できます

教員詳細ページ更新の流れ



●対象者は、卓越教授、特別教授、特命教授、教授、准教授、講師、助教、助手、特任教授、特任准教授、特任講師、特任助教です。●教員詳細ページは人事情報のシステムと連動しておらず、人事情報の更新は自動反映されません。人事情報更新を希望する場合は部局の人事担当に相談してください。●職名・

所属等は月次でIRデータ課が一括更新していきますが、その他の情報は基本的に現在のものが掲載され続けます。必要に応じて随時ご自身で情報更新するようお願いいたします。●詳細は東大ポータルサイトの便利帳から、「教員検索」のページにある「教員詳細ページ更新マニュアル」をご確認ください。

東大では、「教員検索」コンテンツを作成し、大学ホームページ(www.u-tokyo.ac.jp)のトップ画面最上部に検索窓を置いて公開しています。教育・研究活動に直結する情報を社会に届けることは大学にとって非常に重要だからです。実際、このコンテンツには月に16万超のアクセスがあり、学内外から広く利用されています。東大の教員にアクセスする最初の一步となる教員検索ページに、7月から機能が追加されました。教員自身が自分の情報を自由に更新できるようになったのです。これからは必要に応じて頻繁に更新することも可能です。社会とともに生きる東大の教員として、ご自身の情報の更新にご協力をお願いします。

名前	(記入例) 東大 太郎 / TODAI Taro
学位	博士 (工学)
職名	教授
自己紹介	ケンブリッジ大学で自然科学を学び、数年前アカデミア外で過ごした後、早稲田大学で日英関係における補償問題を研究し、博士課程を修了しました。東京大学の博士課程において、太平洋戦争後に海外に抑留された日本兵について研究しました。現在、コミュニケーションと多様性について研究する一方、東大の広報活動を担い、研修を行っています。また、大学LGBTQ+教員会を設立し、マニフィエスタのサポートを行っています。
問い合わせ先アドレス	***@***.u-tokyo.ac.jp ※@を@に置き換えてください。 / Please replace "@" with @.
問い合わせ先電話番号	03-1234-5678 / +81-3-1234-5678
所属	大学院総合文化研究科 △△専攻
所属サイトURL	▶ http://www.u-tokyo.ac.jp/
研究紹介	主に「少数者」という観点でつながっている3つのエリアで研究しています。 外交史：太平洋戦争後、数年間強制労働者として抑留されていた日本兵について 科学コミュニケーション：非英語圏の大学における科学コミュニケーション、及び日本の研究者によるクラウドファンディングの利用について
専門分野	言語学
研究テーマ	理論言語学 (統語論)
研究テーマに関するキーワード	統語論、意味統語論
実績等URL	▶ http://www.***.u-tokyo.ac.jp/research.html
researchmapページへのリンク	▶ researchmap
Scopusページへのリンク	▶ Scopus
ResearcherIDページへのリンク	▶ ResearcherID
CiNii Booksページへのリンク	▶ CiNii Books
ORCIDページへのリンク	▶ ORCID
その他リンク	▶ リンクタイトル1 ▶ リンクタイトル2

※見本は日本語版ですが英語版も同様です

自己紹介コメント

これまでの経歴や、現在の活動内容などについて、簡単に紹介することができます。研究室への進学希望者や、研究協力者、メディア等も意識しながら、人となり伝えるような自己紹介コメントを発信しましょう(300字以内)。たとえば、出身の都道府県や出身校などの情報も記しておく、同郷の人や母校の後輩に何か前向きなきっかけを促す場合があるかもしれません。

問い合わせ先

問い合わせ先として、メールアドレスや電話番号を記載することができます。もちろん、記載する場合は、望まない問い合わせが届く可能性もあることに留意すべきです。

研究紹介コメント

自身の研究の内容について簡単に紹介することができます。研究室への進学希望者や、研究協力者、メディア等も意識しながら、なるべくわかりやすい言葉で主な研究内容や研究目的等を発信しましょう(300字以内)。

学術データベースへのリンク

8桁の研究者番号(科研費番号、e-Rad番号)を入力すると、科研費の研究課題(最新10件)を表示できます(すでに入力済みの場合もあり。異なる場合は修正可能)。また、researchmap ID、Scopus Author ID、CiNii Author ID、CiNii Books ID、ORCID IDなどを入力すると、それぞれのサイトの当該研究者ページへのリンクを表示できます。

その他リンク

研究室のホームページや研究内容の紹介動画などを自由に選んで、当該ページのタイトルとリンクを3つまで表示できます。

科研費 (最新10件)

審査区分 / 研究分野	小区80030:ジェンダー関連
研究課題キーワード	LGBT/ジェンダー/キャンパス風土/学生支援

研究課題

■ LGBT当事者が大学において抱える困難とニーズに関する包括的研究 研究代表者
研究種目: 基礎研究(C) / 研究期間 (年度): 2019 - 2022

情報更新は自分の教員詳細ページの右下にあるこのボタンから!

教員情報 個別編集 (更新/サイン)

すでに多くの先生方が情報を更新してくださいました

教員検索は社会との重要な架け橋です。引き続き情報を更新してください!



IRデータ課 (真田、矢吹)
ir-data.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp (内線24660)




海と希望の学校 in 三陸

第3回

岩手県大槌町にある大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センターを舞台に、大気海洋研究所と社会科学研究所がタッグを組む地域連携プロジェクトがスタートしました。海をベースに三陸各地の地域アイデンティティを再構築し、地域に希望を育む人材を育成するという文理融合型の試みです。本学の皆様が羨むような取り組みの様子をお伝えします。

三陸の海が見える中学校で対話型授業を行いました～鶏肉は何の肉かは、ホントに分からない

北川貴士  大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター 准教授

三陸の海の多様性を知り、自分たちの暮らす地域の特性も学びながら地元への愛着や誇りを考えていくための本事業メインプログラムのひとつ「実習・対話型授業」を、6月25日に釜石市立唐丹中学校で行いました（全校生徒32名・担任の先生方、センター教員・研究員6名、社会科学研究所・玄田有史教授、県振興局1名参加）。



まず午前、理科室で峰岸助教が中心になって、三陸に戻ってきたサケの鱗の顕微鏡観察を行いました。生徒らは、鱗に刻まれた年輪から年齢がわかることや、年齢を逆算して生まれ年を調べると、震災（2011）年に海に降りたサケの数が少なかったことを知り、サケ自身が捉えた記録から震災の影響を感じとってくれました。実習後の感想は、「大半が3～5年で帰ってきていたが、8年かかっていたのもいたし、2年で帰ってきているのもいて驚いた」、「ほかの生物はどこで年齢が分かるのだろう」といったものでした。身近なサケから新たな発見、気づきを得てくれました。

午後には海に関する絵本（唐丹周辺に伝わる昔ばなし「しおふきうす」、事業の趣旨にあわせ「スイミー」）の紹介を北川が行ったあと、玄田教授による対話型授業を行いました。人口減少が問題となっている地域に重要なのは、自ら活動



玄田教授による対話型授業



唐丹中学校の校舎からの唐丹湾を臨む眺め。リアス海岸の狭い平地に寄り添うように民家が立ち並んでいます。当日は天気もよく、海から校舎に吹きこんでくる「やませ」も心地よく感じられました

する（希望）活動人口であることを説明したあと、自分たちの町の良いところを発見してもらうことを目的に、「唐丹の良いところ・好きなところ」を漢字一文字で生徒と先生にボードに書いてもらい、その字に込めた思いについてみんなで話し合い、感想を述べあいました。自由質問コーナーでは、研究や普段の活動・生活について質問がなされ、スタッフ全員で丁寧に回答しました。最近メディアで、3割の東大生が分からなかったと話題になった「鶏肉は何の肉ですか」という質問も出ました。われわれは一瞬顔を見合わせたのですが、研究員が「ニワトリがどんな生き物なのかは、本当に難しい問題なんだよ。だから、もともとどうい

種の鳥だったかを研究されているんだよ」と回答。実は奥の深い問題を提起してくれていました。終了後、生徒らから「希望を持ち続けたい、将来について考えるきっかけになった」「海にはいろんな謎がある、唐丹にも普段考えない良いところがあることを知った。地元の言い伝えに

ついて両親・祖父母に聞いたり、自分でも調べたりしたい」「ほかの人の質問からたくさん学べるし、自分の質問でもっと調べたり、考えたりしてみたい。『少しでも気になったことがあったら質問しよう』という言葉に勇気が出た」といった感想が寄せられました。唐丹中学校では、日ごろから海や生物に関心を持っている生徒が多く、授業の意図と中身がよく理解されており、一日を通して笑いの絶えない充実した時間を共有することができました。私たち実施者にとっても、生徒との対話を通じて、今後の研究に関する活動や発信のあり方について、多くの気づきをえました。



ボードに書かれた唐丹の良いところ、好きなところ。文字の色や大きさはいろいろ。予想もしない漢字が次々と書かれました。「ないものはない、共生」は玄田教授のコメント



部局長だより 第2回

～UTokyo 3.0 を導くリーダーたちの横顔～



工学部・文学部編

国際化教育と起業教育と社会連携

昨今の主な取組みを紹介いたします。1つ目は国際化教育です。背中を押せば伸びる学生が多いのに国際交流力を十分に引き出せていない現状を案じ、進学生全員に全学の国際総合力認定制度への登録を呼びかけることとしました。また、旅費と奨学金を支給する形で、冬にオーストラリア、夏にカナダに学部生を送る短期海外派遣コースを始め、現地の大学の工学部と連携して研究室の現場や講義も体験してもらいます。2つ目はアントレプレナー教育です。産学協創推進本部との連携を強め、第一線の研究者が参加する駒場生向けの短期合宿ゼミを、企業の協力の下、今夏に開催します。必ずしも全員に起業してもらうことが目的ではなく、早くから社会との接点を持つことが重要と考えました。アントレプレナー精神なしに経済活性化はないと思います。3つ目は社会連携です。2年半前の社会連携・産学協創推進室発足以降、先端技術+土木、量子コンピュータなど、専攻を越えた寄付講座を設立。1月には11号館に寄付によるHASEKO-KUMA HALLが誕生します。また、本部や近隣自治体と協力して浅野地区を社会連携拠点にする構想も進行中。人工物工学研究センターに続いて工学部附置となる大規模集積システム設計教育研究センターもこの「根津バレー」構想の一翼を担う予定です。



工学系研究科・工学部長
大久保 達也 趣味: 酒と旅

1600頁の大著が語る人文学の意味

漢字の登場で、言葉は目に見えるものになりました。ただ、近年は字を手で書かなくなり、目に見えない電子データになりつつある。字に限らず五感で捉えられないものが増え、不安感が広がる社会に、文学部はどう関わるのか。そんな問題意識を胸に、文学部長になりました。印象的だったことが2点あります。一つは、古井戸秀夫先生の『評伝 鶴屋南北』が読売文学賞を受賞したこと。1600頁超の大著の完成に要したのは10年。先生の研究人生が凝縮した、物質的にも大変重みのある一作です。もう一つは、6月に行った公開講座。本郷では10回目の今回、新しい現象が見られました。いつも年輩の方が多いのに、参加者の約半数が40歳未満だったんです。講師は鈴木泉先生。題目は「スピノザ/ライブニッツ問題」。難解なテーマに、雨の中200人が集まりました。各々の出来事は、人文学の本質と希望を示しているように感じます。

学術の評価基準が数値となり、人文学には厳しい状況ですが、数値化できないものに価値を認めないのは貧しい社会です。文学部は人の心に届く言葉で語り続けるしかありません。先日理事が視察した常呂実習施設がある北海道北見市や、秋山聴先生の縁が深い和歌山県新宮市との地域連携を糸口に、2年の任期を通じて人文学の役割を考え、発信していきます。



人文社会系研究科・文学部長
大西 克也 趣味: 音楽

UTokyo 第15回 バリアフリー最前線!



熊谷晋一郎室長が
取材原稿で伝える
障害研究の現場②



症状の消失から人生の回復へ

左右を間違えずに靴を履くこと、不安をやりすごすこと、思考を言葉にすること一周りの人々が当たり前に行えることが自分にはできない。今から振り返ると生き辛さを抱えた少年時代だった。一方で、障害のある同級生のサポート係になるなど、排除されがちな仲間と自然と寄り添う面もあった。その後、私立の中学校に進学。似た仲間のコミュニティに身を置き、徐々に生きづらさが軽減していく。その頃、精神科医フランクルの著作などにも影響を受けつつ自身の来し方を振り返り、精神科医を志すようになり理科三類に入学した。

医学系研究科
笠井清登 教授の巻



当時の東大精神科は外来派と病棟派の抗争が続いていたが、今さら志を変えるわけにもいかず、精神科に入局。外部病院での研修中も地域の作業所に挨拶周りに行くなど、地域に向向っていく臨床スタンスは赤レンガから学んだものでもあった。同時に、医学部でも周縁化されがちだった精神医学には生物学的の研究が必要と考え、寸暇を惜しんで研究に没頭した。

やがて、生物学的研究を身につけた自分と、当事者性を見え隠れさせながら理解者ぶる自分とを、器用に使い分けることに葛藤を感じ始める。そうした頃、東日本大震災が起きる。居ても立っても居られず、頻繁に現地に赴き、教職員総出でこころのケア活動を担った。それを機に、医療のアウトカムは症状の消失だけではなく、地域文化に根差した人生の回復であること、その過程で精神医学が果たすべき役割を再認識。リカバリー・アプローチ、大学精神科へのピアサポーターの導入など精神保健領域における先端的実践にも注力してきた。

少年時代の笠井氏がまさにそうであったように、集合的に再生産される無意識的価値観の中で、少数派は常に戦いを強いられる現状がある。しかし笠井氏は、むしろ多数派にこそ自分の無意識が行動に与える影響を意識化させ、多様な価値観や多数派・少数派間の権力勾配を自覚できる力を滋養するのが東京大学の役割だと述べる。個人史を原点に置き、現場から離れず、確かな専門知を通じて公正な社会を実現する一無意識の中にあるバリアに精神医学をもって挑む笠井氏の実践は、東京大学のバリアフリーが向かうべき未来を指し示している。

バリアフリー支援室 ds.adm.u-tokyo.ac.jp

ワタシのオシゴト 第160回

RELAY COLUMN

本部総務課総務チーム 佐藤寛也

座右の銘は「母校愛」!

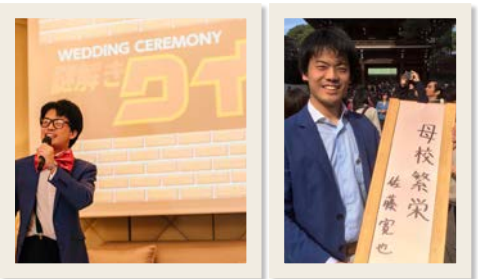


初ボーナスで買った東大カラーのコーディネート

【オシゴト紹介】入学式や卒業式などの全学式典の担当部署です。来春はオリンピック・パラリンピックに向けた改修工事で日本武道館が使えないため、初めての両国国技館での入学式を準備中。おかげで大相撲中継を見る目が変わりました。普段は本郷・安田講堂の中で、大学の代表窓口として学内外の様々な問い合わせや依頼に対応しています。人事系、経理系、情報系、果ては肉体労働まで。愉快的仲間にもまれて、楽しさとやりがいに満ちた日々です!

【ワタシ紹介】学生時代に五月祭の実行委員長。2015年入職、駒場の学生支援課に3年→本郷に来て2年目。2018年に業務改革理事賞受賞。副業として東大生協の非常勤役員。週末は教育学研究科の社会人大学院生(大学経営・政策コース)。愛読書は『東京大学百年史』。東大に一番詳しい東大職員を目指し、Wikipediaの東大関連ページの更新に挑戦中。

ずっと憧れていたこのコラム執筆の機会をいただき、感謝です!次は『学内広報・佐藤寛也特集号』のお声がけをお待ちしています(笑)。



(左) どこでも「イベント請負人」。(右) 明治神宮で祈願

得意ワザ: スリッパを抱えて走る(内輪ネタで失礼)
自分の性格: 何事も「とりあえず全力でやってみよう」
次回執筆者のご指名: 大菌悠平さん
次回執筆者との関係: 職員を目指すきっかけになった方
次回執筆者の紹介: 寡黙そうに見えて実は雄弁家

デジタル万華鏡

東大の多様な「学術資産」を再確認しよう



第4回

附属図書館総務課 主査 大澤類里佐

アーカイブズ事業、どうでしょう?

お待たせしました!連載第1回で予告した、2020年度「東京大学デジタルアーカイブズ構築事業」の公募を開始、応募受付中です。この機会に部局でお持ちの貴重な学術資産をデジタル化してみませんか?

2018年度は11部局13事業が実施され、画像の史料編纂所「備後福山阿部家史料」(所蔵史料目録データベース <http://www.wap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/>にて公開)のほか、明治新聞雑誌文庫所蔵宮武外骨蒐集資料(法政政治学研究所)、附属常呂実習施設所蔵史跡モヨロ貝塚ガラス乾板写真(人文社会系研究所)、柏園書館所蔵紙地図(空間情報科学研究センター)など貴重なコレクションがデジタル化されました。2019年度は12部局15事業が実施中です。



「月番日記」備後福山阿部家史料-03-013(史料編纂所蔵)

デジタル化された学術資産のメタデータ(資料名やコレクション名、二次利用条件など)は第2回でご紹介した、東京大学学術資産等アーカイブズポータルからも発信されますので、学内外の多くの方に貴重な資料の存在を知っていただけます。なお、ポータルの発信力強化を目指して、学外関係機関とのデータ連携をすすめています。

デジタル化のメリットは資料の認知度向上や、教育・研究での新たな活用の可能性が広がることなどがあります。また、利用による劣化防止はもちろん、災害などで原資料が被害を受けた時に、データではありませんが旧来の姿を未来に伝えられることが期待できます。

この事業で対象となる「学術資産」は各部局等で所蔵・管理している、学術研究のために収集された、あるいは学術研究の成果である、紙資料(図書や雑誌、古文書、地図、図面など)、標本、画像、動画、音声ファイル、立体物(標本や実験器具)などで、デジタル撮影かつインターネット公開が可能なものです。なお、メタデータ作成経費はこの事業に含まれますが、調査・研究や保存・修復の費用などは対象外ですのでご注意ください。

撮影したい資料の点数が少ないけれど対象になる?画像の公開方法は?メタデータの提供方法は?といったご質問は、推進室にお問い合わせください。応募メ切りは9月27日(金)です。お待ちしております。

学術資産アーカイブ化推進室

digital-archive@lib.u-tokyo.ac.jp

インタープリターズ・第145回 バイブル

総合文化研究科教授 松田恭幸
科学技術インタープリター養成部門

日曜日に新聞を

海外で新聞を買おうと売店に行ったとき、新聞の厚さに驚いたことがないだろうか。特にアメリカやイギリスの日曜日の新聞の厚さは格別で、日本の新聞の元旦号のようなインパクトがある。イギリスでは日曜日は日刊紙のThe TimesやThe Guardianは休刊日で、代わりに独立した編集部を持つ姉妹紙のThe Sunday TimesやThe Observerが発行される。日曜紙の本体も付随する別冊も分厚く、これを週末にじっくりと読むのが、イギリス滞在中の私の楽しみの一つだったりする。

日曜紙の紙面づくりは日刊紙とは方向性が少し異なっている。日刊紙と同様に、前日に起きた出来事が本誌の紙面で報じられるのはもちろんだが、例えば地球温暖化の影響で外来生物が定着しつつあり、イギリスの固有種が危機にさらされていることを訴えるといった記事も、多くの写真入りで紙面の1面以上を使って掲載されたりもする。政治家や有識者へのロングインタビュー記事や時事情勢についての解説記事も多い。本誌についてくる別冊には、書評や演劇・コンサート・映画・テレビドラマなどへの批評が毎週20ページ以上も掲載されているし、特定のテーマの特集が延々と(?)組まれている別冊が付いてくることもある。イギリスの日曜紙は価格が日刊紙より高いにも関わらず発行部数は姉妹紙よりも多く、取材に時間をかけた記事を読むために、普段は新聞を買わなくても、日曜日だけは新聞を購入するという人が一定数いることが分かる。

日本でも朝日新聞のGlobeに代表されるように取材記事を重視した別冊を拡充しようとする動きもあるが、残念ながら現時点では必ずしも成功しているとは言えないようだ。しかし、速報性でも携帯性でも優位性を失った新聞に強みが残るとすれば、多くの優秀な記者に支えられる取材力だろうし、その取材力を最も生かせる場合は、忙しい平日の朝に読む日刊紙ではなく、日曜紙や別冊の日曜版だと思う。日本でもゆったりとした気持ちで新聞を広げ、数時間かけて記事を読むような週末を過ごしたいなあと思う。そして、そうした紙面の中に、しっかりと取材に基づく良質な科学記事も大きな存在感を持って欲しいと思う。

科学技術インタープリター養成プログラム
science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp

蔵出し! The University of Tokyo Archives 文書館 ぶんしよかん



第21回

収蔵する貴重な学内資料から
140年に及ぶ東大の歴史の一部をご紹介します

太陽系全カタログ:盾は銀河の彼方へ

1969年1月18日、安田講堂を占拠する学生に対し、警視庁の機動隊が封鎖解除を開始しました。機動隊が学生たちの抵抗を「解除」するために使用した道具のひとつに、ジュラルミン製の盾があります。学生の投げる石を避けるため、木枠に盾を並べて突入路も作られました(図1:東京大学文書館 S0087/0008)。東京大学文書館の所蔵資料にも、盾が一枚あります(図2:東京大学文書館 S0075/0033)。盾の出自と来歴は明らかではありませんが、学生の手にあったものを後に東京大学が保管することになったようです。



現在この盾がまとうのは、大学紛争の政治的緊張感だけでなく、

1968年前後の欧米のヒッピー文化やサイエンス・フィクション文化への憧憬がまつた空気感です。盾には、「太陽系全カタログ」「パルサーの発見された日」「フォボス」「宇宙のミッシングリンク」「銀河系の彼方へ」といった言葉が書き込まれています(図3)。「太陽系全カタログ」とは、1968年にスチュアート・ブランドが創刊した雑誌『全地球カタログ(Whole Earth Catalog)』のタイトルをもじったものでしょう。また、当初は地球外知的生命体による信号ではないかとも想像されたパルサーが、ジョスリン・ベルによって発見されたのは1967年のこと。そして、火星の衛星フォボスが人工天体であるという、ソ連の天文学者ヨシフ・シクロフスキーの説が日本語で出版されたのは1968年でした。



落書きの主たちがどこで盾を手に入れたのか、その「ミッシングリンク」が埋まることはないかもしれませんが。それでも若者たちが、全地球どころか全太陽系を相手にしてやろうとホラを吹きつつ、大好きな宇宙の神秘にまつわるフレーズを盾に書きなぐったことは間違いのないでしょう。今でもどこかで若者たちは、『全地球カタログ』の終刊の言葉にあったように、「foolish」で“hungry”であろうとし続けているかもしれません。想像力を広げてみれば、色は違えどこの盾が、何やらモノリスにも似て見えてきます。

東京大学文書館

トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features,Articles)に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル（一部省略している場合があります）
7月10日	本部管理課	2019年9月、東京大学目白台インターナショナルビレッジが誕生！
7月11日	医学系研究科・医学部	「2019年度厚生労働省臨床研究総合促進事業 治験・倫理審査委員会委員研修」研修生募集
7月11日～8月8日	広報戦略本部、総合文化研究科・教養学部、理学系研究科・理学部、医学系研究科・医学部、新領域創成科学研究科	光合成研究から次世代太陽電池の開発へ。光エネルギー変換にかけた35年。 「0」から「1」をつくり出す研究で電子スピンの可能性を拓く。 「病気をもって大丈夫」という回復のあり方と社会を目指して。 生活者の「地べたのロジック」を言語化し、人と生きものの関係を考える。/ UTOKYO VOICES
7月15日～8月7日	広報戦略本部、先端科学技術研究センター、工学系研究科・工学部、医学系研究科・医学部、高齢社会総合研究機構、理学系研究科・理学部、史料編纂所、社会科学研究所、東洋文化研究所	宇宙用から、地球用へ CO2 からプラスチックを作る あなたは、職場でいきいきと働いていますか？ 産・学・官・民のリビングラボで、新たなビジネスを創出 手のひらに、石油コンビナート 史料を理想的な形で未来に伝える 社会の変化を個人のレベルで追跡調査 グローバルな視点で歴史をとらえなおす / FSI プロジェクトシリーズ
7月18日	情報基盤センター	学際大規模情報基盤共同利用・共同研究拠点 第11回シンポジウムが開催されました
7月18日	史料編纂所	国際研究集会「在外写真史料の研究と歴史学」を開催
7月18日	総合文化研究科・教養学部	超域文化科学専攻の大西由紀助教が第24回日本比較文学会賞を受賞
7月23日	スポーツ先端科学研究拠点、教育学研究科・教育学部	オックスフォード大学、ケンブリッジ大学クルーのボート漕ぎ動作データ計測の実施について
7月26日	本部博物館事業課	総合研究博物館の米田 穰教授が第32回濱田青陵賞を受賞
7月26日	理学系研究科・理学部	無限時間経過後の量子状態を表すニューラルネットワークの構築に成功
7月29日	理学系研究科・理学部	発生機序から紐解くフグ類のトゲの進化の謎
8月1日	生産技術研究所	「科学自然都市協創連合～宇宙開発発祥の地から繋ぐコンソーシアム～」を設立
8月2日	本部社会連携推進課	東京大学FSIシンポジウム「未来社会のためのAI」を開催
8月8日	理学系研究科・理学部	雷がもたらす強力なガンマ線フラッシュ 地上での放射線量の測定に初めて成功
8月10日	グローバルキャンパス推進本部	北京大学党書記一行の来訪

新副理事の略歴と就任の挨拶

7月8日付けで就任された新副理事の略歴および就任の挨拶を掲載します。

本学のさらなる発展に向けた裏方として



副理事

濱口太久未

Takumi Hamaguchi

このたび、本学副理事（兼）経営企画部長を拝命いたしました濱口と申します。

昭和63年に本学教養学部文科I類に入學して平成4年に法学部（第II類）を卒業し、同年文部省に入省して以来、省の内外におい

て教育・学術・文化等に関する事務に携わって参りました。また、その間、3年にわたり国立大学において知的財産法に関する教育・研究に従事するとともに、昨年度は大学院生の立場で知的財産法に関する勉学にも励んで参りました。

本学副理事としては総合企画調整の任務を頂戴しており、「東京大学ビジョン2020」や、大学をプラットフォームとするSociety 5.0等の諸課題の実現・推進に向けて、五神総長をはじめとする多くの教職員の方々のお取組が円滑に進むよう、30年ぶりの東京大学を色々な意味で新鮮に感じつつ、事務方の一員として微力を尽くして参りたいと存じます。今後とも宜しく願い申し上げます。

平成4年3月 本学法学部卒業
 平成4年4月 文部省入省（大臣官房政策課）
 平成12年4月 和歌山県教育庁生涯学習課長（～平成14年3月）
 平成17年4月 文部科学省研究振興局学術研究助成課評価専門官
 平成19年10月 内閣総理大臣補佐官（教育再生担当）付企画官（～平成20年8月）
 平成25年1月 内閣官房教育再生実行会議担当室参事官
 平成25年4月 大阪大学知的財産センター特任教授
 平成28年4月 文部科学省高等教育局主任大学改革官
 平成29年7月 文部科学省国立教育政策研究所生涯学習政策研究部長（併）生徒指導・進路指導研究センター長
 平成31年3月 早稲田大学大学院法学研究科先端法学専攻（知的財産法LL.M.コース）修了
 専門分野：教育行政、知的財産法
 研究内容：1)「著作物」茶園成樹編「著作権法（第2版）」有斐閣、2016年 2)「チーム学校」に関する国の対応方策「生徒指導学研究」第16号

CLOSE UP

宇宙開発発祥の地を繋ぐコンソーシアムが発足

(生産技術研究所)



科学自然都市協創連合 協定調印式・設立記念式典
協定調印式にて、各自治体の代表者の皆さんと、生研の岸利治所長（前
列右から2人目）

7月23日、日本のロケット開発黎明期を支えた糸川英夫教授が所属していた生産技術研究所は、設立70周年記念事業の一環として、ロケット開発にゆかりのある各自治体（千葉県千葉市、東京都杉並区、東京都国分寺市、秋田県由利本荘市、秋田県能代市、鹿児島県肝属郡肝付町）とともに「科学自然都市協創連合～宇宙開発発祥の地から繋ぐコンソーシアム～」を設立し、協定の調印式と設立記念式典を行いました。

ロケット開発の繋がりを契機に発足した本コンソーシアムは、今後、科学技術を活用して夢と活力のあるまちづくりに取り組むことを今

日的な意義と捉え、連携の輪を拡げ、横断的な取り組みを協働して推進していきます。

糸川教授らが進めたロケット研究開発は、西千葉の地に始まり、荻窪の地で産業界の同志を得て軌道に乗り、1955年4月に国分寺の地で記念すべきベンシルロケットの水平飛翔公開実験に至りました。その後、西千葉で継続された水平発射飛翔実験を経て、上空への斜め飛翔実験を実施すべく、道川および能代、内之浦へと急ピッチで飛翔実験の拠点を展開していきました。これら各地は「ロケット研究発祥の地」と称するにふさわしい歴史的な経緯を備えています。

CLOSE UP

2020年のボート会場で五輪選手らのデータを計測

(スポーツ先端科学研究拠点)



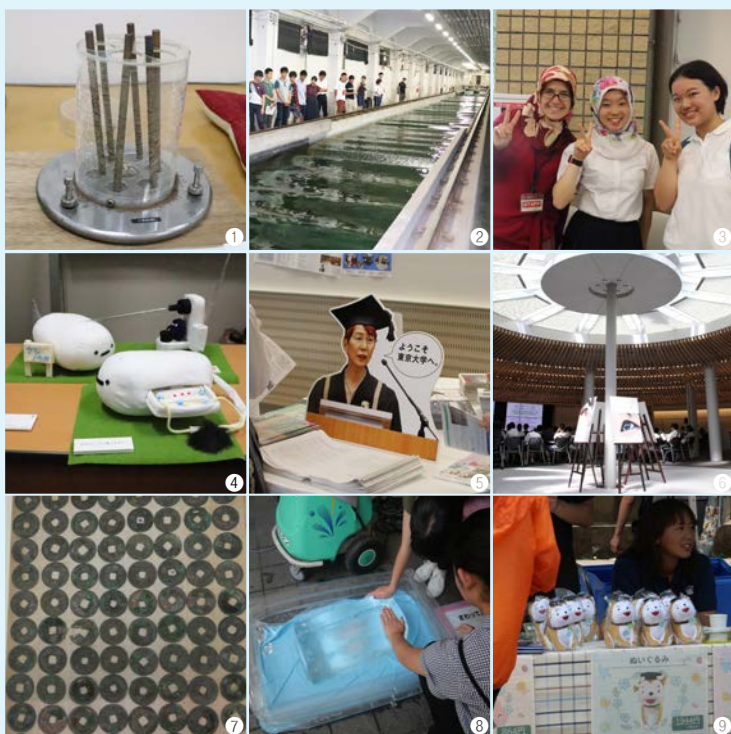
オックスフォード大学OBのPaul Bennett氏の測定風景。Bennett氏はリオデジャネイロオリンピックの金メダリスト（英国代表、8人乗りのエイト競技）

東京オリンピックのボート競技・カヌー競技の会場である「海の森水上競技場」の完成披露式典が6月16日に行われました。式典に続いて行われた完成記念レガッタには英国よりオックスフォード大学、ケンブリッジ大学クルーが招待されました。両校のボートクラブは古い伝統を誇り、テムズ川で行われる競漕大会はThe Boat Raceと呼ばれ、ロンドンの春の風物詩として広く知られています。

今回、来日したメンバーは、このThe Boat Raceの出場歴を持つだけでなく、オリンピックや世界選手権のメダリストも含まれています。この機会を利用し、スポーツ先端科学研究拠点(UTSSI)の「最適な漕運動実現のための科学的

アプローチ」プロジェクト（研究代表者：教育学研究科 野崎大地教授）で開発された計測システムを同競技場内のジムに持ち込み、ボート漕ぎ運動時のデータ計測を実施しました。

すでに日本人選手の計測によって、ハンドルやシートの動かし方、ハンドルや足を置く部分に対する力のかけ方には、一流選手特有のパターンが存在すること、そのパターンが理論的にも効率が良い漕ぎ方であることが見えつつありました。今回、さらに高いスキルを持つクルーのデータが同様に優れたパターンを示したことは、考え方の正しさを裏付けるものです。この漕ぎ方を実現するためにはどのようなトレーニングを行えばよいのか、研究をさらに進めます。



**高校生のための東京大学
オープンキャンパス2019より**

今号の表紙は、8月7日～8日のオープンキャンパスから、地震研究所の噴火実験の様子です。水飴と水と着色料と重曹とクエン酸をマグマに、ペットボトルをマグマだまりに見立て、重曹とクエン酸の化学反応でCO₂の泡が噴出する仕組み。火口にポケモンの模型があるのを見た少年らがかぶりついていました。左は広報課が回って撮った画像から。①は申請しないと通常は入れない地震計博物館の鳴式簡易地震計。同素材、同サイズで底の形だけ違う棒6本の倒れ方で揺れの大きさを測ります。②は工学部の舟型試験水槽を用いた船舶抵抗試験の様。③は東洋文化研究所の「ヴェールを通して世界を見よう！」。一昨年好評だったヴェール試着体験が今年も人気に。④は工学部2号館の「サイエンス×アートプロジェクト」。女子美術大学とのコラボ企画で培養肉をテーマにしたアート作品が並びました。⑤は男女共同参画室による上野千鶴子先生パネル。ライブラリープラザと伊藤国際学術センターで来場者を出迎えました。⑥は同じく男女共同参画室による瞳が印象的なポスター展示。⑦は経済学図書館の誇る貨幣コレクションの一部。⑧は理学部の受付に置かれた氷。ミスト噴出機とともに涼を提供。⑨は運動会ブースのイチごぬいぐるみ。2種揃えると阿吽の狛犬に。……皆さん、暑い中お疲れ様でした。



異分野融合研究

2006年に文科省の科学技術政策研究所から報告書「忘れられた科学－数学」が提出され、「数学－他分野融合研究を振興すべき」と結論付けられたことにより、数学と他の学問分野、また産業界との共同研究が活発化した。大学院数理科学研究科でも2013年にICMS（附属数理科学連携基盤センター）を設立し、積極的に他分野との融合研究や産業界との連携を支援している。私もICMSを通じていくつかのプロジェクト研究に参加し、医学系、農学・生命科学系の方々と共に共同研究する機会を得てきた。

この共同研究の中で、当初最も困ったのは「言葉」である。研究打ち合わせの中でごく自然に使われる、エクソン、プロテオーム、ChIA-Petなどの専門用語はもとより、最初はDNAと遺伝子の区別もわかっていなかった。これは相手側も同様で、数学者同士で会話を始めると、宇宙人が話しているようだと嘆息されたりもした。また、「文化」面でも、数学にはあまり縁のない動物愛護、人権保護、特許取得などに厳しい規則があり、研究討論や発表においても細かな配慮が必要で習慣の違いを感じた。

しかし、こうした言葉や文化の違いが研究上の大きな障害となったかという点、そうではない。私事で恐縮だが、20年ばかり前、フランスにひと月半ほど滞在したことがある。宿泊した施設の近くにベトナム人の主人が経営する小さな総菜屋があり、頻繁におかずを買って求め、フランスパン、ワインとあわせて夕飯を楽しんだ。主人はフランス語しか話さず、私はフランス語が全く話せなかったのだが、特に困ることはなかった。主人は売りたい、私は買いたいのであり、目指すところが一致していたからである。融合研究でも同様で、目指すところが同じなら言葉や文化の違いは何とでもなる。

自分の知らない最先端の世界に触れることはわくわくする体験であり、自分の身につけた知識や手法がその世界で活躍するのを見るのはとても嬉しいことである。これからも分野を超えた共同研究がますます推進され、特に若い方々がこうした研究に積極的に参加できる環境が整うことを期待している。

時弘哲治
(数理科学研究科)

